

に於てもその筆觸に内在的に含み多き味ひを醸すべきは推し得て、かくも示さざる事の稀れなるを思ひ、時代としての影響、畫家自身に於ける素質等特異な交錯の下にのみ此の畫在るを識る。繰返すまでもなく、些かなるものへの關心が、そは一朝に眺めやられて作上げられるものに非して、常住に感じつゝありしもの結果としてこの造形的な足跡を残す。之に伴ふ一種孤獨の感は禪宗文化に隨從し來るものながら、かく物に即して泌々と滲出す心情は僧ならずとして俗に住しても反省し味到せられる處であらう。かゝる表現のおそくに個性的に解せらるゝは、延いて一畫人として單庵を他より切離して明確な存在を主張するものであらう。之が大きな自由の感よりもかく閉された個性的な心情に即する故に或は足利期の主流の繪畫には遠きものなるを思ひ、かゝる畫の存在の忘却せられ易く、又時折の咏嘆に委せられ埋れやすきを思ひながら、猶ほ時代の一面面を物語るものとして又その深き玩味を要求するものである。(熊谷)

五、葛徵奇筆 水墨山水圖 東京 松岡於菴衛氏藏

綾本墨畫 掛幅 堅 四〇・三幅 横 八一・六幅

葛徵奇の畫は世に流傳するもの極めて乏しい、淺野梅堂の博覽を以てしてその漱芳閣書畫銘心錄に名を載せざるは固より、本國支那における著錄類を涉獵するも殆ど寥々晨星の觀がある、今葛徵奇といへば人は必ず岩崎男の所藏に係る溪陰鎖夏圖を想起する、然り彼一軸は唯一の徵奇畫であつて、そは恰も畫僧蘿窗が淺野家の一幅によつて傳はる如きものである、傳にいふ、徵奇名は無奇、介龜と號す、海寧の人、崇禎の進士、官光祿寺少卿に至り、告歸して湖山の間に放浪し、以て終る、蕪園詩集あり、間適の致あり、また善く山水を畫くと、斯人既に専門畫人に非ず、恐らく作る所もまた妙かつたのであらう。

頃日友人三成重敬君、山内容堂が嘗てその侍讀たりし土佐の學者故元老院議官松岡時敏に贈りしものとて容堂が例の山陽流もて箱に明葛徵奇水墨山水絹本の十字を書き付けたる一幀を携へ來つて、僕に示す。僕諦視數分始めて口を開

いて言ふ、此畫或は尋常鑑畫家者流以て葛徵奇畫とせざらんと計るべからず、岩崎男の彼畫に比するに風趣著しく相同じからざるものあれば也、然れどもその畫は斷じて俗士の能くすべき品彙匹儔にあらず、且や溪陰鎖夏圖と較ぶるに差別の裡平等の存するあり、疎樹門の如く相對するは其一、畫面の中心門樹の奥深く瀑布を落してその瀑布末に於て相分るゝは其二、この二つのものは恐らく葛氏の最も好む所にして、また實に餘家と類を異にして、徵奇畫を時流中に特立せしむる所以、題語の文字に至つても一見相距る遠きが如きも、例へば葛字と徵字と相結ぶあたりに痼癖の蔽ひ難きものあり、これ其三、思ふに彼は款識に崇禎甲戌七月の年紀あるに見るも壯年の作たること明かなるに反し、此は全く脂粉の香を脱却して枯淡の境に入れる老年の作なるのみ、暫く眞蹟を以て之を見做さんと欲すと。三敬君膝を打ちて、余も亦た然か思へりとして兩人相顧みて共に樂しむ。

思ふに斯畫の最も面白き點は草書の矢字なして落ち來る瀑布に在る、否、瀑布に對して一字横に架けたる石橋に在る、昔者藝阿彌は觀瀑僧を待つ一空屋を畫いてその構想の奇を謳はれたが、徵奇は一人の點景人物を容れず、畫に對する者をして擅まに畫中に入らんことを期待して居る、あゝ人待ち顔にも見ゆる石橋の面白さよ。用墨用筆の上より觀れば披麻皴に加へた焦墨の點苔が淡々しい畫面に能く活趣を與へて居ることを見逃すわけに行かない。畫は淡黃褐の紋綾の上に畫かれて居る、統本は明畫に多いが綾本なることが文人畫としてまた珍らしい風景を添へて居る。(協本)

六、七、日吉山王祭圖 京都 法林寺

四曲屏一雙 紙本着色 堅 一七〇・〇幅 横 三七四・八幅

慶長寛永を中心とする其の前後の風俗圖に諸社の祀祭の光景を圖するもの多く、其の最も代表的なものとしては、舊名古屋離宮障壁畫の一部、及び豐國神社藏豐國大明神臨時祭圖屏風等があるが、本圖も亦是等祀祭圖の類品の一とし

て、如上の作品に次いで相當に優位を占むべき佳品であらう。

一双の屏風の金地の畫面に、見るが如く遠山と樹林と湖面と、是等自然の風物のうちに、點在せる社殿と長く布列せる市屋と、または水上の扁舟、山下に隠見せる神輿に加ふるに、此の盛儀に際して喧噪せる無數の人馬を配して祀祭らしい一場の光景を展開せるもののである。而して其の神輿が先を争ふて社域を下り湖岸に繫留せる小舟に移坐せんとするさまは、一見して比叡山麓、日吉神社に於ける船祭の光景を想像せしめる。其處には此の社特有の惣合神門は畫面の大部を掩ふて居る雲金の爲に、當然見るべくして、而も求められないが、七基の神輿は無論日吉祭神七座、即ち大宮、二宮、聖眞子、客人、十禪師、八王子、三宮諸神の神輿を示すものなるべく、また右屏面の向つて左下隅、供膳を滿載せる船上に張り繞らした幔幕に、猿猴文様を染出せるは一層此の想定を裏書きするものであらう。

當社に關する萬般の雜事に就いては、既に天正十年社務行丸の撰述と傳ふる日吉社神道祕密記に説いて詳かなるものがあるが、此の船祭の權輿に關しては『近代延文中、大洪水、唐崎之浦水込陸地無之、其時御船祭有、其以後如此、近年者一圓御船祭也、上古無之、新儀也』とある。爾來遠く現時に及んで近畿地方に於ける盛儀の一となつてゐるが、其の次第に就いては年中行事大成或は山口幸充撰嘉良喜隨筆に傳ふる所最も詳細である。今本圖と對照して是れを概記すれば、四月中の申の日『申の刻神輿幸崎へ神幸あり（中略）七社の神輿馬場を下るに先後を争ひ進む事甚だ急なり。（中略）神輿は飛ぶが如く七本柳に至り、御船に乗奉るに速かなるを勝とし、神輿の輶少しく船ばたに掛るとひとしく綱をかけて船中へ引乗せ、船人數十人船を漕事又急にして沖へ出し、辛崎より五町許南に御船を列す。』（年中行事大成）とあるもの即ち右隻の光景なるべく、上記の供膳の船は同書に『次に御供船より素絹に五條を着したる僧、神輿船に對ひ御膳を備へ、次第に海へ落す事七々四十九膳並御菓子御酒等あり』とある其の船を此處に點出したものであらう。

たゞ山王祭には此の船祭に先んじて四月三日に行はるゝ神の神事がある。そ

は神靈の神に移坐して大津の濱に神幸ありしと云ふ傳説に出たもので、同社草創時代より行はれた祀祭であると稱され、また年中行事大成に依れば、『同日大津四の宮より松本明神の神人相添騎馬にて大神御迎に參着し（中略）樓門より神をいだし、大津四の宮に渡御あり、路次の家々には庭燎を燒く云々』とあるものがそれである。而して本屏風左隻の圖様を見ると、多數の社殿を背景として、布列する市屋の間を、行列物々しく神木らしきを奉じて歩を運んでゐる光景は、此の神の神事を圖寫せるものでないかと想像される。たゞ多數の近世の文獻によると、此の神は毎歲社域より伐り出すものもあるにも拘らず、こゝには枯木の如く描出されてゐることを疑問とされるが、嘉良喜隨筆に『大なる大木の神』とある點より考へると、本圖また恐らく其の神事の光景を圖寫せるものであらう。

若し此の兩圖の手法に至つては、當代風俗圖通途の手法によつて、墨描の下當りに圖を構へ、是れに五彩濃麗の色を設け、後に描起しの墨描を加へたもので、其處に何等の奇趣を有して居ないが、たゞ地面の表現には全く他に類例を見ない手法と材料とを並用せることが見られる。それは現今、既に全面に互つて暗く燦染して居るが、土壤或は砂礫の物質を表現する爲に大小形状等種々なる植物性の粒子（大なるは長さ二耗を越ゆるものがある）を撒布せることで、本圖にとつて最も奇異な一特色を爲せる點であるが、其れが果して如何なる性質の粒子であるか、また土質の表現以上に色彩的效果を、これによつて求めたかどうかは判定し難い。

本圖は見るが如く畫面の大部を雲金によつて覆ひ、其の技法にも亦多分の形式化の跡を留めてゐるが、細部の手法、特に人物の描起しの法は最も舊名古屋離宮對面所障壁風俗圖に類してゐる。而して本圖が圓滿院宸殿風俗圖に見る簡古の畫致なく、豐國大明神臨時祭圖に比しても尙樸茂の態の乏しいことは、當然それ等の畫蹟に比して時下る作であらうと想定されるが、而も寛永期の多數の類品に見る冷かさを全然見ないことは、やがて本圖が舊名古屋離宮風俗圖に次いで、慶長末期頃に繪かれた作品であらうと推定せしめる。無論圓滿院風俗

圖または豊國祭圖等のこの種の名品に比しては及ばざることは遠いが、同じく京狩野の何人かの畫蹟としてまた類品中の一佳品とすることが出来る。

本圖は現在四曲一雙の屏風に改裝されてゐるが、是れは最近法林寺より恩賜京都博物館に出品された後に、保存の爲めに改裝されたもので、其の以前は四面づゝ二組の襖であつた。而して右隻の裏面には麝香猫を圖した狩野派の畫蹟が貼されて居た。たゞ此の裏面の畫蹟に就いて一言したきは、同圖が一見して慶長當時の様式を有するものでなく、明かに寛永或は以降の作であることである。是れによつて、此の祀祭圖の年代推定が試みらるゝことを惧るゝことである。それは用紙の紙織ぎに於ても相違し、最初より表裏を爲して居たものではなかつたであらう。(田中)

書 評

波士敦美術館藏支那畫帖 自漢至宋

Portfolio of Chinese Paintings in the Museum of Fine Arts, Boston.

Han to Sung Periods.

東洋繪畫の研究にとつてボストン美術館の蒐集が如何に大なる價值を持つてゐるかは説くまでもない。而して日常之に接し得ない研究者にとつては隔月に發行さるゝ同美術館の彙報の外にはシレン氏の「在米支那繪畫圖錄」(O. Siren, Chinese Paintings in American Collections, 1927)が殆んど唯一の手頼りであつた。

今回發行せられたる支那畫帖は同館所藏のうち漢より宋に至る尤品七十二點を百四十四枚の圖版に收め、同館東洋部長富田幸次郎氏の解説を付したるものである。シレン氏の圖錄は獨り同館所藏ことに漢宋間の作品に限られないものではあるが勿論すでにこの圖錄の半數以上を重載してゐる。併しながらその印

八、畫學齋過眼圖藁

東京 山田鐵郎氏藏

帖裝 紙本墨畫 竪 一八糎 横 一四糎
(研究資料「畫學齋過眼圖藁」参照)

九、銅板毛彫像

東京 總持寺藏

竪 六〇・六糎 横 七八・八糎
(鳥居龍藏「長保三年の銘ある金剛童子鏡に就いて」参照)

刷も必ずしも上乘と云ふを得なかつたのに對し、この圖錄は圖版の型に於てシレン氏のそれを超ゆると共に、部分圖等の増し添へられたるは勿論、印刷の技術に於ても著しき徑庭あるを見るのである。蓋し一般に圖錄の價值の一半は懸つて印刷の良否にあると云ふべく、この優秀なる印刷が我國の大塚巧藝社によつてなされたことは殊にその勞を多とすべきものであるであらう。

今收載せられたる各作品を見るに最近同館に入りて吾々の眼になほ鮮かなる傳閣立本筆帝王圖卷は云ふに及ばず、曾て國華にも紹介せられたる景賢舊藏宋元書畫冊を始め、徽宗摹張萱筆搗練圖卷、陳容筆九龍及び四龍圖卷、傳董源筆平林霽色圖卷、傳李成筆雪中行旅圖軸等は之を知らざるものなく、佛畫に法華堂根本曼荼羅、大德寺舊藏五百羅漢圖軸、萬壽寺舊藏十六羅漢圖軸、傳西金居士筆十王圖等の名品を外にしてなほ西域燉煌系の諸佛畫の數點を收めてゐる。漢六朝間の製作とせらるゝ彩塼人物圖も曾てその一部を紹介せられたるに止まり、近く同館に入れる北齊校書、文姬歸漢、趙伯駒筆漢高祖入關等の諸圖卷ま